金融動向

◇銀行券は引続き低水準

（金融市場—前年を上回る資金余剰）

1月の金融市場をみると、銀行券の運用余剰額は32,519億円と前年(34,644億円)をやや下回った。一方、財政資金は、一般財政が利下げ後、反動による郵便貯金の受入れ減などから前年を下回る傾向にとどまったほか、外為市場の払替え金額が増加したため、全体では25,799億円の増加となり増加額は前年(同30,870億円)を下回った。この結果、「その他要項」(増加71億円、前年同592億円)と合わせた期間資金余剰額は6,049億円と前年(3,245億円の余剰)を上回った。これに対して日本銀行は、主として手形オペレーションにより資金を吸収した。

資金供給状況

（単位：億円）

<table>
<thead>
<tr>
<th>12月</th>
<th>1月</th>
<th>前年同月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>銀行券</td>
<td>32,943</td>
<td>△ 32,519</td>
</tr>
<tr>
<td>財政資金</td>
<td>2,568</td>
<td>△ 25,799</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>△ 1,280</td>
<td>△ 671</td>
</tr>
<tr>
<td>資金週足否</td>
<td>31,655</td>
<td>△ 6,049</td>
</tr>
</tbody>
</table>

準備預金 | 2,737 | 1,283 | △ 4,777 |

本行信用 | 28,918 | △ 7,332 | △ 1,532 |

うち出 | 15,085 | △ 332 | △ 3,968 |

債券売買 | 2,833 | — | — |

債券短期売入 | — | — | — |

貿易手形 | 11,000 | △ 7,000 | 5,500 |

売出手形 | — | — | — |

銀行券発行残高 | 193,472 | 160,953 | 156,042 |

準備預金残高 | 26,405 | 25,122 | 20,627 |

本行発行残高 | 23,290 | 22,958 | 20,453 |

本行貿易手形残高 | 32,000 | 25,000 | 41,000 |

（注）△印「銀行券」は運用残、「財政資金」は増加、「その他」は振出、「資金週足否」は資金余剰、「準備預金」は預金増、「本行信用」は信用縮小。

1月の短期金融市場をみると、無条件物貿易の中心レートは年始の銀行券の還流を中心とする大幅余剰地合いを示し上旬中急ピッチの低下を示したあと、中下旬にかけてはおおむね横ばい内での動きで推移、結局全月では0.5%低下、8.875%で越月した。一方、手形売買レート(2ヵ月物)は、金利先放問の台頭から都銀が売り強圧の姿勢を強めたことが円転コストの低下等から外銀の売り圧力が前月とは様変わりに弱まったことなどから、低下傾向をたどり、結局全月では0.6875～0.75%低下し、月末水準は8.75～8.8125%となった。

この間、市場資金盤の途中平残は、全信託、信託等出金のポジション好転を示してコール市場を中心に再び増加した。

（通貨—銀行券は引続き低水準）

1月の銀行券平残は、前年比+3.2%と前月(+3.3%)並みの低水準にとどまった（季節調整済前月比も低水準)=前月−0.5%）。これは、経済活動の伸び悩みが続いていることによるものとみられるが、このほか、1月の場合は例年銀行券の還流する月だけに、昨年末の急激な値上がり月初の残高が低水準であったことも平残下げ要因として響いたものとみられる。

12月のMo+CD平残前月比は+7.8%と、前月やや上昇(前々月+7.6%→前月+7.9%)したあと、小幅の低下となった。この結果、10～12月平

銀行券の動き

（単位：%）

<table>
<thead>
<tr>
<th>前年同期月(月毎)</th>
<th>季節調整前月(月毎)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>55年1～3月平均</td>
<td>20.0% 2.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>4～6ヶ</td>
<td>1.5% 1.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>7～9ヶ</td>
<td>5.6% -0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>10～12ヶ</td>
<td>3.9% 1.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）季節調整はセントラルバンクによる。
<table>
<thead>
<tr>
<th>通貨関連指標の動き</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>平残前年同期(月)比</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>通貨(M1)</td>
</tr>
<tr>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>55年1～3月平均</td>
</tr>
<tr>
<td>4～6月</td>
</tr>
<tr>
<td>7～9月</td>
</tr>
<tr>
<td>10～12月</td>
</tr>
<tr>
<td>55年9月</td>
</tr>
<tr>
<td>10月</td>
</tr>
<tr>
<td>11月</td>
</tr>
<tr>
<td>12月</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 平残各項目およびM1'+C D末残は、一部日本銀行統計局発表による。
2. M3=M1+預金通貨
M3=M1+預金通貨
M3=M1+預金通貨+金融商品、通信、信用組合、保険金保証の預貯金+信託(金銭信託、預託信託)
CD=マネーマーケット対象金融機関の改善性預金のうち、一般（法人、個人）、公金組（預金者別内訳は銀行別の預金者区分による）
3. Pは連結。
### 財政資金対民間収支実績

<table>
<thead>
<tr>
<th>56年1月</th>
<th>前年同月</th>
<th>前年同月比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一般財政</td>
<td>21,477</td>
<td>23,108</td>
</tr>
<tr>
<td>純一般</td>
<td>23,716</td>
<td>24,453</td>
</tr>
<tr>
<td>租税</td>
<td>24,324</td>
<td>21,649</td>
</tr>
<tr>
<td>社会保障</td>
<td>1,646</td>
<td>1,615</td>
</tr>
<tr>
<td>防衛関係費</td>
<td>1,627</td>
<td>975</td>
</tr>
<tr>
<td>公共事業関係費</td>
<td>1,618</td>
<td>1,826</td>
</tr>
<tr>
<td>交付金</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>義務教育費</td>
<td>1,059</td>
<td>995</td>
</tr>
<tr>
<td>一般会計諸払</td>
<td>3,288</td>
<td>2,497</td>
</tr>
<tr>
<td>資金運用部</td>
<td>3,131</td>
<td>1,220</td>
</tr>
<tr>
<td>保険</td>
<td>4,322</td>
<td>3,609</td>
</tr>
<tr>
<td>退職</td>
<td>7,216</td>
<td>8,348</td>
</tr>
<tr>
<td>国鉄</td>
<td>701</td>
<td>1,139</td>
</tr>
<tr>
<td>食丸</td>
<td>876</td>
<td>1,256</td>
</tr>
<tr>
<td>代償</td>
<td>3,115</td>
<td>2,601</td>
</tr>
<tr>
<td>新規中・長期国債</td>
<td>7,422</td>
<td>8,849</td>
</tr>
<tr>
<td>発行</td>
<td>7,422</td>
<td>8,849</td>
</tr>
<tr>
<td>償還</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>外為</td>
<td>3,100</td>
<td>727</td>
</tr>
<tr>
<td>総収支じり</td>
<td>25,799</td>
<td>30,870</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）*印は損益。

### インターバンク米ドル直物相場（クローリング）

<table>
<thead>
<tr>
<th>直物相場</th>
<th>サイバーサハリントン比</th>
<th>サイバーサハリントン比</th>
<th>直物相場</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1月14日</td>
<td>271.20</td>
<td>-13.57</td>
<td>53.30</td>
</tr>
<tr>
<td>3月9日</td>
<td>264.10</td>
<td>-16.62</td>
<td>50.30</td>
</tr>
<tr>
<td>1月23日</td>
<td>300.00</td>
<td>-2.67</td>
<td>866.12</td>
</tr>
<tr>
<td>5月6日</td>
<td>218.15</td>
<td>-11.18</td>
<td>1,135.24</td>
</tr>
<tr>
<td>7月</td>
<td>226.85</td>
<td>-35.77</td>
<td>1,086.26</td>
</tr>
<tr>
<td>8月</td>
<td>219.20</td>
<td>-40.51</td>
<td>1,035.21</td>
</tr>
<tr>
<td>9月</td>
<td>210.00</td>
<td>-45.28</td>
<td>1,189.23</td>
</tr>
<tr>
<td>10月</td>
<td>211.75</td>
<td>-45.45</td>
<td>1,249.27</td>
</tr>
<tr>
<td>11月</td>
<td>216.42</td>
<td>-49.09</td>
<td>1,032.26</td>
</tr>
<tr>
<td>12月</td>
<td>203.60</td>
<td>-51.28</td>
<td>1,225.33</td>
</tr>
<tr>
<td>1月15日</td>
<td>205.20</td>
<td>-50.10</td>
<td>877.34</td>
</tr>
<tr>
<td>1月20日</td>
<td>203.30</td>
<td>-52.25</td>
<td>897.30</td>
</tr>
<tr>
<td>中</td>
<td>201.55</td>
<td>-52.82</td>
<td>866.27</td>
</tr>
<tr>
<td>下</td>
<td>205.20</td>
<td>-50.10</td>
<td>877.31</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. スワニー重場比の＋は円安（ドル高）、-は円高（ドル安）を示す。
2. 直物スパッド付のdはデイスカント、fはプレミアムを示す。
3. *中心相場、**直物中心相場比。
4. 55年6月以降の直物スパッドは実施価。

日にはイラン・米国間の人質問題解決に伴い返還されるドル資産に対する思惑等から一時的に再び200円台割れ）、結局205円20銭で超月した(前月末203円60銭)。

一方、先物相場は、中締まで米ドル金利の小反発を Ragnar で直物相場に推移したが、月末にかけては米ドル金利低下から堅調となり、デイスカント基は月中小幅拡大にとどまった(3ヵ月前物年率、12月末8.153%→1月末8.771%)。

(貸出——企業間需資は大企業では製造業を中心になお強く)

12月の全国銀行(銀行勘定)貸出は、17,050億円増と前年(22,863億円増)を下回り、月末残高の前
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>外 資 預 金</th>
<th></th>
<th>貸 出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>7〜9月</td>
<td>10〜12月</td>
<td>11月</td>
</tr>
<tr>
<td>金 増 減 額（末残）</td>
<td>23,672</td>
<td>33,830</td>
<td>43,187</td>
</tr>
<tr>
<td>国 前年比増減率（%）</td>
<td>-1.0</td>
<td>+69.3</td>
<td>+20.5</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+7.4</td>
<td>+8.1</td>
<td>+8.2</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>+1.6</td>
<td>+1.8</td>
</tr>
<tr>
<td>金 増 減 額（末残）</td>
<td>11,004</td>
<td>21,624</td>
<td>16,008</td>
</tr>
<tr>
<td>市 前年比増減率（%）</td>
<td>2.5</td>
<td>+93.1</td>
<td>7.2</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+7.9</td>
<td>+9.3</td>
<td>+9.1</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>+2.0</td>
<td>+2.4</td>
</tr>
<tr>
<td>地 増 減 額（末残）</td>
<td>11,502</td>
<td>11,622</td>
<td>25,704</td>
</tr>
<tr>
<td>方 前年比増減率（%）</td>
<td>-44.5</td>
<td>+41.5</td>
<td>+32.3</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+7.8</td>
<td>+7.4</td>
<td>+8.0</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>+1.1</td>
<td>+1.3</td>
</tr>
<tr>
<td>長期信用銀行</td>
<td>増 減 額（末残）</td>
<td>-751</td>
<td>666</td>
</tr>
<tr>
<td>前年比増減率（%）</td>
<td>(-724)</td>
<td>(-789)</td>
<td>5079</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+0.5</td>
<td>+3.0</td>
<td>+0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>-1.2</td>
<td>+1.9</td>
</tr>
<tr>
<td>相 増 減 額（末残）</td>
<td>5,458</td>
<td>14,281</td>
<td>7,473</td>
</tr>
<tr>
<td>互 前年比増減率（%）</td>
<td>-31.4</td>
<td>+23.8</td>
<td>2.2</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+8.2</td>
<td>+8.3</td>
<td>+9.3</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>+2.0</td>
<td>+2.1</td>
</tr>
<tr>
<td>倍 増 減 額（末残）</td>
<td>6,899</td>
<td>18,322</td>
<td>8,400</td>
</tr>
<tr>
<td>用 前年比増減率（%）</td>
<td>-40.8</td>
<td>+14.1</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>金 残高の前年同期（月比）</td>
<td>+10.3</td>
<td>+10.1</td>
<td>+11.3</td>
</tr>
<tr>
<td>行</td>
<td>季除込み残高の前期（月比）</td>
<td>+2.2</td>
<td>+2.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 残高の前年同期は貸付残高のうち。
2. 前年比増減率のカッコ内は前年の実数。
3. 55年12月は速報値。

は企業規模、業種間の貸行性が拡大している。
これに対し金融機関の融資態度をみると、上記企業業態の貸行性を反映し、なお貸出が減少傾向を示しているのにに対し、他業界では貸出増加傾向のポジション悪化を促進し、貸出利益の低下を伴う面を懸念して今後、総じて融資態度に積極性を加えつつある。

（預金――全国銀行の実質預金はやや持続）
12月の全国銀行実質預金は、月中旬13,831億円増で内訳は前年（14,698億円増）と増の増加にとどまらない。使残高前年比増加率は＋81%と前月（＋82%）比減少したが、これには貸出増加前月末日以伴う預金高が高まることのそし、預金増加の増加を実質では前年を上回る増加となっても先端である。かかる預金増加については、一部銀行の預金大台乗せ経路の期末平日預金運動の推進が遅れるが活発な影響しているほか、前月の預金貯金金利低下後繰り替え金等への資金シフトが一貫したし、個人ボーナス資金を中心にそこ
金融機関ポジショント趋向
（単位：億円）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>55年</th>
<th>55年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>7〜9月</td>
<td>10〜12月</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>78,401</td>
<td>76,431</td>
</tr>
<tr>
<td>金融機関</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>銀行</td>
<td>89,518</td>
<td>97,840</td>
</tr>
<tr>
<td>都市銀行</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>地方銀行</td>
<td>12,171</td>
<td>16,447</td>
</tr>
<tr>
<td>相互銀行</td>
<td>4,103</td>
<td>3,872</td>
</tr>
<tr>
<td>信用金庫</td>
<td>27,899</td>
<td>28,068</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 資金ポジションの定義
全国銀行＝コール・ローン＋賃入手形＋金融機関貸付金＋銀行引受手形（余談並用分）－借入金＝コール・マネー－売換手形
相互銀行＝コール・ローン＋賃入手形＋金融機関貸付金＋銀行引受手形－借入金＝コール・マネー－売換手形
信用金庫＝コール・ローン＋賃入手形＋金融機関貸付金＋金融機関貸付金＋駆動金＝コール・マネー＝駆動金－売換手形

2. ドラム円は最終額を指す。
3. 55年12月は速報値。

このような預金取引が進むことも寄与している模様である。

また12月の中小企業金融機関の実質預金（相互銀行は実質資金量）も、同様の事情から前年を下回り、月末残高の前年比伸び率を低下した。

この間、全国銀行（銀行勘定）の資金ポジションは、上記預金貯蓄事情の下、月中21,653億円の悪化と前年（同、19,642億円）並みの悪化となった。

（貯金金利—短期金利に一歩と低下幅を拡大）
12月の全国銀行（銀行勘定）貯金（約定）金利は、月平均0.251%と前月（0.131%）比一段と低下幅を拡大し、月末水準は8.274%となった（うち短期金利は、0.389%＜前月0.231%＞と今次低下局面では最大の低下をみた結果、55年3月以降9ヶ月ぶりに長期金利下回る水準に達する。この結果、55年8月以降5ヶ月間の通算低下幅は、0.619%となり公定歩合引下げ幅（1.75%）に対する追従率は35.4%となった（うち短期金利の通算低下幅＜1.080%＞の公定歩合引下げ幅に対する追従率は61.7%）。当月の貸出金利の大幅低下は、①当月の需要を賃借金等の低金利下回る金利に、プライム、標準金利適用大企業を中第2次プライム・レート改定（1.0%）見合の金利引下げが進むことや、②優良中堅・中小企業の需給示向に対しても、預金金利の引下げを背景に金融機関内に下げ見落しの先が多かったことなどが背景とみられる。

また、12月の中小企業金融機関の貸出金利も、相互銀行が0.124%（前月0.071%）、信用金庫が0.016%（前月0.008%）という低金利を拡大した。

◇株式市況は上昇、現金レートは低下
1月の株式市場を見るとき、年初来上旬末にかけては欧米機関投資家等海外資金の買いが活発化したことに加え、先行き金利低下を見越して業界法人の買いを増えた、さらには個人投資家も物色意欲を強めたため、銭銭、造作、電力等大型株、優良株を中心に上昇した（内訳は株価平均上昇7,315円と既往最高値を示現）。ただ、その後は海外資金の買いが一筋なく続いたものの、高値警戒感、信用規制強化懸念等が台頭したことから調整場面となり、高値を市合い減少状で推移した（月末株価指数510.06、前月末比15.96の上昇）。この間、月平均上昇は380百万株（前月296百万株）と、前月中の値換株の大増から高水準となった。

1月の公社債流通市場を見るとき、長期債市場では、平年中来国金利の反落や現金レートの低下等をなじめて証券会社の玉手当が積極化したため小幅低下した。その後月次には農林水産金融機関等投資家の実需買いが依然盛上らないこと
<table>
<thead>
<tr>
<th>株式市場</th>
<th>価値</th>
<th>指数</th>
<th>予想平均</th>
<th>1日平均</th>
<th>日証金引続き</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>東証</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>最高</td>
<td>473.55</td>
<td>6,904.81</td>
<td>1,494</td>
<td>1,982</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>最低</td>
<td>450.40</td>
<td>6,502.80</td>
<td>1,494</td>
<td>2,236</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>桜の</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>最高</td>
<td>767.46</td>
<td>6,708.49</td>
<td>1,982</td>
<td>2,076</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>最低</td>
<td>728.12</td>
<td>6,033.73</td>
<td>1,982</td>
<td>2,280</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1. 予想平均は、株価の推移を基に計算されるものである。
2. 予想平均は、株価の推移を基に計算されるものである。
3. 株価指数のカッコ内は高値・低値の月日。

公債市場

<table>
<thead>
<tr>
<th>国債</th>
<th>政保債</th>
<th>地方債</th>
<th>利付金利</th>
<th>一般事業債</th>
<th>電力債</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>(第26期)</td>
<td>(東京都期)</td>
<td>(地方期)</td>
<td>(平年期)</td>
<td>(期間)</td>
<td>(期間)</td>
</tr>
<tr>
<td>価値</td>
<td>57/1〜59/8</td>
<td>57/5〜60/12</td>
<td>57/7〜62/4</td>
<td>57/7〜62/4</td>
<td>65/6〜65/3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）事業債の発行条件は3年ものと2年もの（カッコ内の）の2つ立て。

や米国金利の下げ渦がもって低下を招いたが、月末にかけては再び金利先安観が強まり米利 cowboyが売り遅れられた一方、信金、信組等中小金融機関の短期借直が好感され、証券会社の玉手で再び積極化したため低下傾向をした。これを指摘封経の6.1%国債（前値9.75%）と場利回りでみると、前値の9.75%から9.452%へと低下しそれされることに9.602%まで戻したが、その後再び低下し、最終に9.400%と6.350%の小幅低下を示した。
この間、現行レートは、前月末来事業法人の買いが増加したことや米国金利の反落等から海外筋の買いも増す形したことから月央まで一貫して低下傾向を示したが、その後はコール・手形レートとの裁定から都地銀の委託売りが増加気味となったことから加え、証券会社の自己現売りも増大したため、レートは横ばいに推移した（3ヶ月12月末9.425%→1月末9.320%）。

1月の増資（上場会社有価株払込み）は、709億円（前年154億円）と引き続き前年を上回った。

1月の起債（純増ベース、国内、金融機を除く）は、前月の発行条件改定から引き続き起債意欲が盛上り、全体では6,265億円と前月（3,266億円）並びの高水準となった。消化状況をみると、事業債は既発債市場の持直しを映した機関投資家の買い活発化から順調に消化されたほか、政債、地方債についても払込目安点ではほぼ完了となり、かなりの売れ残りを生じた前月とは様態に消化地合いが好転した。

1月の転換枝票の発行は、起債ゼロ（前月5銘柄、320億円）と再び低調となった（55年10、11月ゼロ）。

1月中の・長期国債発行額（純増ベース、市中発行分）は、長期国債6,000億円、5年物割引国債500億円、4年もの中長期利付国債1,173億円の計7,673億円となった（前年8,750億円）。このうち、証券会社引受け・持ち入分の消化状況をみると、長期国債は引受額が前月と同額の低水準（500億円）であったことから払込日までに完売となった。しかし、5年物割引国債については当月から発行条件が改定（応募者利回り0.805%引下げ）されたため、大口個人投資家の購入見送り気分が強く、また4月の中長期利付国債についても事業法人の買いが不振であったためいずれも完売不振を余儀なくされた。

1月の金融債発行（純増ベース）は、481億円と前月に続き前年（1,064億円）を下回った。これは、前月の発行条件改定から新発債応募者利回りが既発債市場利回りを下回る状況が続いていたため、事業法人個人等の購入意欲が引き続き低調であったことによる。

### 起債状況

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>55年</th>
<th>55年</th>
<th>56年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>7〜9月</td>
<td>10〜12月</td>
<td>11月</td>
<td>12月</td>
</tr>
<tr>
<td>事 業 債</td>
<td>1,160</td>
<td>2,010</td>
<td>280</td>
</tr>
<tr>
<td>(81)</td>
<td>(857)</td>
<td>(96)</td>
<td>(996)</td>
</tr>
<tr>
<td>うち剰余</td>
<td>1,040</td>
<td>1,510</td>
<td>240</td>
</tr>
<tr>
<td>(50)</td>
<td>(630)</td>
<td>(48)</td>
<td>(70)</td>
</tr>
<tr>
<td>一般</td>
<td>1,775</td>
<td>1,825</td>
<td>330</td>
</tr>
<tr>
<td>(1,571)</td>
<td>(1,597)</td>
<td>(229)</td>
<td>(776)</td>
</tr>
<tr>
<td>地 方 債</td>
<td>3,440</td>
<td>3,810</td>
<td>1,151</td>
</tr>
<tr>
<td>(2,798)</td>
<td>(3,605)</td>
<td>(1,049)</td>
<td>(1,494)</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>6,375</td>
<td>7,645</td>
<td>1,761</td>
</tr>
<tr>
<td>(4,458)</td>
<td>(6,059)</td>
<td>(1,202)</td>
<td>(3,266)</td>
</tr>
<tr>
<td>金 融 債</td>
<td>30,512</td>
<td>40,483</td>
<td>13,411</td>
</tr>
<tr>
<td>(2,453)</td>
<td>(9,803)</td>
<td>(4,299)</td>
<td>(4,249)</td>
</tr>
<tr>
<td>うち利付</td>
<td>11,128</td>
<td>12,612</td>
<td>5,640</td>
</tr>
<tr>
<td>(3,544)</td>
<td>(4,534)</td>
<td>(2,425)</td>
<td>(1,034)</td>
</tr>
<tr>
<td>新 規 中・長期 債</td>
<td>25,718</td>
<td>24,983</td>
<td>8,574</td>
</tr>
<tr>
<td>(25,718)</td>
<td>(24,983)</td>
<td>(8,574)</td>
<td>(3,843)</td>
</tr>
<tr>
<td>うち証券会社 引受分</td>
<td>9,015</td>
<td>6,500</td>
<td>3,300</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 有価増資推移（1・2回合計）

<table>
<thead>
<tr>
<th>有価増資状況</th>
<th>有価増資金額推移 (億円)</th>
<th>うち発行払込み額 (億円)</th>
<th>プレミアム額 (億円)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>前年</td>
<td>前年</td>
<td>前年</td>
<td>前年</td>
</tr>
<tr>
<td>55年 7〜9月</td>
<td>87</td>
<td>90</td>
<td>4,279</td>
</tr>
<tr>
<td>10〜12月</td>
<td>75</td>
<td>56</td>
<td>3,288</td>
</tr>
<tr>
<td>55年11月</td>
<td>37</td>
<td>24</td>
<td>1,766</td>
</tr>
<tr>
<td>12月</td>
<td>17</td>
<td>14</td>
<td>726</td>
</tr>
<tr>
<td>56年1月</td>
<td>15</td>
<td>10</td>
<td>709</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) セール発行にかわる証券会社株式処分は含まれます。